

ホワイトアウト



名田庄の低い山も雪が降り吹雪き始めると緊張を強いられる山行となる。地図と磁石を頼りに慎重に進む。

冬、山に入ると、猛烈な吹雪に見舞われてまわりのもの全てがまったく見えなくなる時がある。それがホワイトアウトである。

まだ山岳会に入会して数年の若い人と二人で二月に三ノ峰を目指したことがあった。こちらでも怖いもの知らずのバリバリの現役の頃のことである。

二月に二人だけで山に入れば困難なことになるのは分かっていたが、予想した以上の大雪で途中の六本檜で雪洞を掘るはめになった。スコップを持っていかなかったので、アルミの食器で二人がなんとか横になれる程度の雪の穴を掘って寝た。

翌日三の峰の小屋に向かった。下山の時に迷わなため先端に赤色のテープを巻いた竹竿を何本も用意し、それを見える範囲内にさしながら登った。先頭はラッセルの負担が大きいのので交互に交代して登った。

三の峰の小屋へは小さいピークを三つほど越えたあと左にトラバースして入ることになるので、その数を数えてこの先左にルートをとれば小屋に至るところで曲がった。雪は登り始めた頃より激しくなっていた。

ぼんやりと前方が見えていたのが徐々に遠くが見えなくなり、そのあとは急速に視界

が狭まり、最後に空と山の稜線との境界が消えた。二、三メートル先がやっと見えるくらいであった。

空と山の境界が消えると、これは本当に怖い。

白一色の純白の空間に閉じこめられ、上下左右を目で確認することができない。分かるのは立っているそのことだけであった。

ここで二人が別れたらもうどうすることも出来ない。あわててあり合わせのロープで互いをつないだ。

この先に小屋があることは分かっていたので、磁石でそれを確認する。磁石が示した方向は考えていた方向と全く逆であった。

われわれは間違った方向を向いて歩いている。背筋が寒くなるというが、そのとき襲われた恐怖はまさにそれであった。

これでは遭難すると思った。磁石の示す方向が正しい。それは疑ってはいけない。引き返さなければならぬと判断した。パートナーにそのことを伝えて、現在地であると思っている地点と磁石の方向とから、少しずつ手探り状態で後退した。

しばらくしてむこうになにか薄ぼんやりと見えるものがあつた。それが赤いテープであることが分かつた時、ああ、助かつたと思つた。

視界はゆっくりとであつたが開けてきた。二番目の赤いテープを見つけることが出来た。教えられたとおり竿をさしながら登つてきて本当によかつたと思つた。

その日も人の住むところまで下りることが出来なかつた。前日掘つた雪洞に再び潜り込んだ。天井は更に低くなつていた。封筒に入るようにして中に入った。空はすっかり晴れわたり、星がこぼれ落ちるように輝いていた。二人で何とか一晩やり過ごし下山した。

いまはもう、雪の山で雪洞に入つて夜を過ごす気は起こらない。夜は暖かい布団の中で寝たい。それでいいのだと思つている。

(二〇〇七年三月一七日)